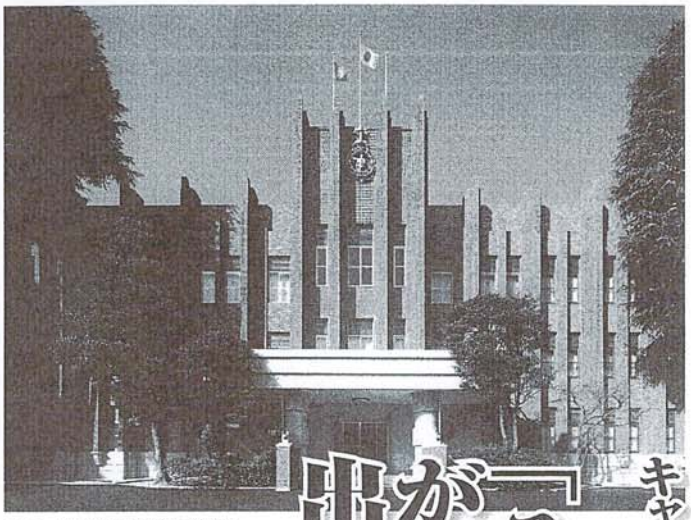
2013年1月15日 財界　新春特別号より

キャンパスの再編など、〝ストーリー性ある〟特色づくりに取り組む拓殖大学――

『その人が持っている力を引き出すことが真の教育。若者の潜在的な能力を引き出す仕組みづくりをしていく！』

拓殖大学総長・学長　渡辺　利夫



キャンパスの再編成を進める拓殖大学

「開拓、公共、立志といった創立時の精神を、今の時代にあった形に編集して伝えることが必要」と語る渡辺氏。明治33年に台湾協会学校として、台湾開発のために貢献する人材の育成を目標に創立された拓殖大学。以来、112年にわたり、国内外で活躍する人材が巣立っていった。創立時の開拓者精神を現代の若者にいかに蘇らせるか――。

ストーリー性ある特色づくりで大学の差別化を

――少子化で入学希望者総数が入学定員総数を下回る大学全入時代に入りました。大学にとっても学生を選ぶ立場から、選ばれる立場に変わった部分があると思います。その中で、拓殖大学の魅力というものをどう訴えていきますか。

渡辺　日本には、800近い数の大学があるわけですが、単なる800分の1の大学であるならば、拓殖大学に未来はない。拓殖大学ならではのストーリー性ある、つまり「物語」を作って、拓大の差別化を図りたいという思いが私にはずっと強くあるんです。

東京大学を頂点とするピラミッドがあって、受験に合格した大学の中から偏差値の一番高い大学を選ぶ。そういう風潮をやめにしたいと思っているんですね。

確かに大学を選択する上で偏差値も重要な要素ですが、それだけじゃありません。大学というのはもちろん専門教育を学ぶところですが、多くの友人や先輩に出会い、恩師に出会い、そしてアルバイトやボランティア活動などを通じて、様々な経験を積む場でもあります。

だから、われわれは学生たちが様々な経験を積める場、つまりフィールドをつくっていきたい。そういうことで、理事長ともども改めて大学の歴史研究を始めたのです。

――大学の歴史研究というのはどんなものですか。

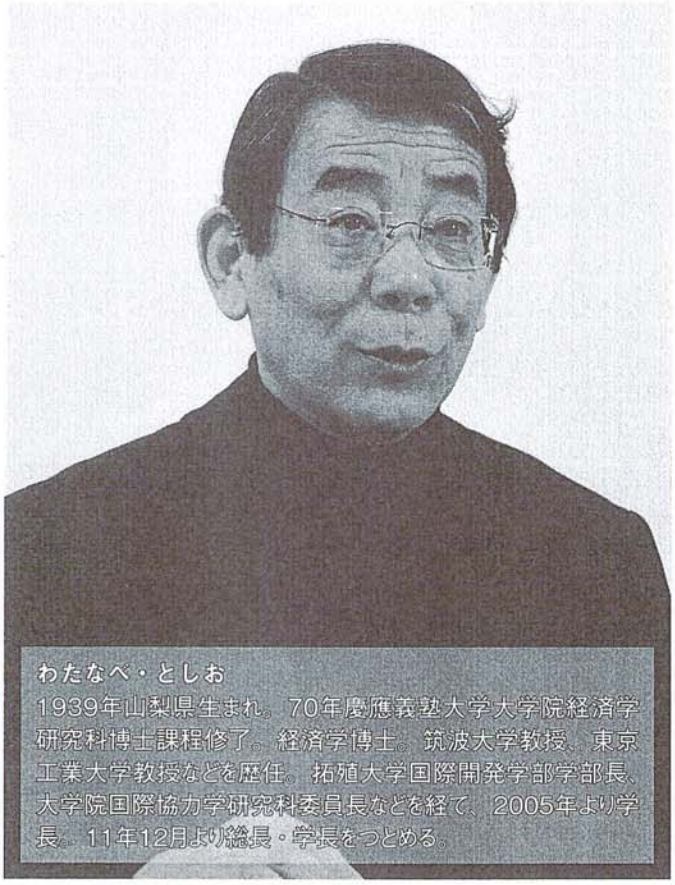
渡辺　拓殖大学は１９００年（明治33年）に、台湾協会学校として台湾開発のために貢献する人材の育成を目標に創立されました。それから１１２年にわたり、海外で活躍する人材の育成を行ってきたわけです。

そうした背景がありますので、本学では現地の言語、現地の文化と伝統を理解する人材の養成に力を注いでいます。拓大は外国語を重視する大学です。現在は外国語専門大学に匹敵する14の言語を学ぶことができます。また、海外からは約１０００人の留学生も受け入れて、非常に国際交流の密度の濃い大学だと思います。

――　海外で活躍する人材育成に定評があるというのが大学の特徴だということですね。

渡辺　ええ。大学創立時には「開拓、公共、立志」といった言葉が並んでおりまして、そうした精神をいかに現在の学生たちに伝えていくか。そういうことで始めた大学史研究であり、私は〝拓大物語〟を作りたい。

つまり、我々の原点にあるのは創立時の開拓者精神であり、先人たちは台湾の荒れ地に行って、治安の悪いところでも精根傾け、現地の人々と一緒になって争いのない豊かな社会を築こうと努めてきたのです。そうした拓大のアイデンティティーをこれからの学生に引き継いでいくことが私の任務だと思っています。



わたなべ・としお
1939年山梨県生まれ。70年慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授などを歴任。拓殖大学国際開発学部学部長、大学院国際協力学研究科委員長などを経て、2005年より学長。11年12月より総長・学長をつとめる。

日本を担うリーダーを拓大から輩出していく

――　その一環が、２００９年から始まった「桂太郎塾」ですね。

渡辺　そう。創立者・桂太郎公爵は明治期に首相や陸軍大臣をつとめ、同じ長州藩出身の吉田松陰を敬愛した人でした。幕末に多数の俊英を輩出した松陰の「松下村塾」のような、これからの日本を担うリーダーを拓大から輩出しようと考えてできたのが桂太郎塾です。

これは正規の授業とは別に、特別講座の形で展開しています。毎年約30人の学生が建学の精神である公共精神や開拓精神を学んでいます。講義は土曜日や平日の夜遅い時間にもかかわらず、学生諸君は非常に熱心に勉強しています。私が見ていても頭が下がる思いです。

実は明治末期の資料を読むと、当時、本学の卒業生の３分の２くらいが台湾や朝鮮、そして満州と海外に赴任している。「国内で就職するなんて、そんな夢が小さくていいのか」というような風潮が当時の本学には漂っていたというんですね。開拓者精神を持った人が多かったんです。

言うまでもなく、卒業生の思想の原点にあったのはアジアの開発です。これは現代にも通じる話です。そうした思いを学生にも持ってもらいたい。同時に教職員も感じてもらいたいと思います。

――　つまり、創立当初からグローバル人材の育成に励んで

きたということですか。

渡辺　はい。先日、ロシア人のモロジャコフさん（本学海外事情研究所教授・ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授）とお話をしたのですが、いまロシアでも台湾に対する関心が高く、日本統治時代の台湾を研究している人が多いと言うんですね。

ロシアは帝国になり、ソビエト連邦になって、中央アジアに手を伸ばして、フロンティア開発を行ってきた国ですから、当然、日本が台湾で何をやったのかに興味があって不思議ではない。

モロジャコフさんはロシアが関心を持っているのは日本が台湾を植民地化して搾取したとか、そういうことではないと言うんですよ。まさに先人たちが現地の人たちと一緒になって汗を流し、豊かな社会を築いてきた、その経験とノウハウをロシアの研究者が自分たちの立場に置き換えて研究しているというのです。私には非常な驚きでした。

残念なことには、日本人自身がそのことを忘れている。だから、その辺の、いつの間にか忘れられてしまった原点を、拓大をベースに現代へ新しい形で伝えていこうじゃないかと考えたのです。

『Educationとは教育と訳されますが、本当は“その人が持っている力を引き出すこと”なんです。本学に来る学生は必ずしもエリートではない、いわゆる普通の若者です。社会にはエリートも必要ですが、まずはきちんと自分の責任を果たし、行動できる人間になってほしい。今はそういう人材育成が必要です』

キャンパスの再編にも着手

――　拓殖大学は現在、東京・八王子と文京区に分かれているキャンパスの再編成を行っていますね。この狙いは何ですか。

渡辺　われわれは平成12年の創立100周年を機に「拓殖大学ルネサンス事業」として、文京キャンパス整備事業を推進してきました。

現在、八王子と文京に1、2年生と3、4年生が分かれて学んでいる商学部と政経学部の学生については、平成27年度より文京キャンパスで4年間の一貫教育を行えるように体制を整えました。

もっとも、都心にあって駅にも近くて便利というだけでは学生は来てくれません。同じキャンパスでの一貫教育の方が、学びの中身も一段と充実すると思います。

よく「6・3・3・4」と言って、日本の教育は小学校が6年間、中学・高校が3年間ずつ、そして大学が4年間と思われがちなんですが、私はそれは違うと思っています。実態は「6・3・3・3」なのではないか。つまり、大学生は就職活動に1年間をとられてしまいますから、どうしても4年間で行わなければならない教育を3年間で展開しなければならない。

私はここに非常にやるせなさを感じているのです。

――　時間的な制約があるということですか。

渡辺　ですから、私は例えば基本となる英語教育などは、高校卒業までにある程度修得し終えていたら、大学教育は、第二語学やもっと専門である経済学や商学といった教育にかける時間に充てられるのではないか。そう思います。高校生にはぜひ大学入学前までに語学修得に励んでほしいと思います。

――　なるほど。逆に八王子キャンパスで空いたスペースはどう活用するんですか。

渡辺　これまでも学生寮を建設したり、体育館のリニューアルやサッカー場の人工芝化を行ってきたりしましたが、実はまだ具体的に決まってない部分

もあるんです。それで今何か出来ないか考えているところなんですが、わたしの個人的な意見としては、シニア層の教育の場をつくることができないだろうかと。

大学はいつまで経っても、18歳から22歳までの若者だけが学ぶ場というのでは、少子高齢化と言われる時代にあっていかにも異様ではないか？　定年を迎えた60代、70代のシニア層の人たちも、実は勉強意欲が旺盛なんです。

12年、文京キャンパスでは近隣住民の方をお招きして、大学を一日体験してもらいましたが、学校で勉強したり、若者に交じって学食で食事をすると、非常に生き生きした表情をして「面白かった、また来たいです」と言ってくれるんです。

だから八王子キャンパスの広大な土地を活かした年配者向けの生涯学習のカリキュラムを作って、シニア層にも魅力的な場を設けることができたらなと考えていますね。

自分を超える第三者のために行動できる若者の育成を！

――若者とシニアが共に学ぶ場というのは面白いですね。

渡辺　今われわれが考えなければならないのは、学生たちにどんな学びのフィールドを与えることができるかだと思います。最近の若者は内向き志向だとか、自分のことしか考えないとか言われますけど、そんなことはない。私は若者が活躍しやすいフィールドを見つけてやれないだけだと思うんです。

11年の東日本大震災の後、学生たちがボランティアチームを立ち上げました。宮城県石巻市や岩手県釜石市に行って、流されてきた木材や瓦礫の撤去をしてきたんです。学生たちは、「人の役に立つことが出来た」という誇りと晴れがましい自分に気づくんです。

恐らく彼らは生まれて初めて、他者の世話、あるいは奉仕をすることの喜びを味わったと思うんです。そして、また被災地に行って人の役に立ちたいと言う。この1年半に400人以上の学生が被災地のボランティアに参加しています。

私は人様のために何かしたいと考えている学生は潜在的に多いのに、そういう場を与えることが出来ないでいたことが問題だと考えます。

――そういう場づくりは今後も続けてほしいですね。

渡辺　本学は10月に釜石市と震災復興へ向けた支援協定を結びました。後藤新平（第3代拓大学長）や新渡戸稲造（第2代拓大学監）は共に岩手県生まれです。このような縁もあり、何かお役に立ちたいと考えて協定を結びました。

人生は自分だけのためにあるものではない。自分を超える第三者のために利他的に行動することによって、自分自身も幸せを感じることができる、そういう存在でもあるのです。復興へ向けたボランティア活動は、学生たちが人間的に大きく成長するきっかけになっています。今後も学生たちの潜在的な力を引き出す仕組みづくりをしていきたいと考えています。

拓殖大学は釜石市と震災復興支援協定を締結した
（野田武則釜石市長（左）と渡辺総長）